

# 次の一手

「激動の中で 兵庫の企業」

白米のような粒が柔らかな乳白色の輝きを放つ。トウモロコシなどのでんぷんから作られ、微生物に分解されるプラスチック原料「ポリ乳酸」だ。海に滞留する大量のプラスチックが問題となり、石油由来の原料削減が進む。それでも「植物由来」と「生分解性」を併せ持つ原料は数少

神戸港の倉庫に保管する「ポリ乳酸」の脇で、事業を展望する松長祐史社長＝神戸市中央区港島6、三井倉庫

## 耐えて10年 SDGsの波 つかみ乗る。

なく、SDGs（持続可能な開発目標）が求められる今、脚光を浴びる。

「海洋プラスチックみ対策で合意した2019年のG20大阪サミットで、風向きが変わった。継続は力なり、ですよ」。化学品商社、神戸精化（神戸市中央区）の松長祐史社長（54）は、ようやく訪れた商機を喜ぶ。

同社は世界2位のポリ乳酸メーカー「浙江海正生物材料（ハイスン社）」の日本での販売を一手に担う。全社

売上高はポリ乳酸の好調もあり、16年度の2億円から、21年度は11億8千万円と6倍近くに伸びた。

急成長の背景には、中国市場と約30年向き合い続けた歴史がある。

証券会社に勤めていた松長社長。1993年、父が興じた化学品メーカー「大地化成」の中国工場新設のために呼び戻された。上海外国語大学で学び、中国での人脈を広げて事業を模索した。

「ポリ乳酸を世界販売する。代理店をやらないか」。06年、中国の友人から声がかかった。現地の大手製薬会社系企業が量産に成功したという。怪しさは感じた。だが友を信じ、日本への輸入に踏み切った。

販路開拓を進め、コンビニの食品トレーや植木鉢などに採用され始めた。ところが、リーマン・ショック後のデフレが長引くにつれ、動きは

止まった。「価格は石油系プラスチックの2、3倍もする。みんながエゴのところではなくなった」

他社製を扱う大手商社が次々に撤退する中、赤字でも取り扱いを続けた。ライバルが減ったところに海洋プラスチック対策の追い風が吹いた。

ポリ乳酸は、さらなる需要拡大が見込まれる。松長社長は「環境への意識を持つ若い世代に知ってもらう」ことを次の目標に掲げる。

小中学校や大学の研究室から問い合わせがあるたび、サンプルを無料で届ける。「地球環境に貢献できる会社として5年後に新卒採用を始め、いずれは令和生まれの人に入ってもらえる会社に育てたい」と松長社長。ハイスン社も近く、中国で株式上場する。

◇原則、毎週木曜に掲載します。

（高見雄樹）

### III 神戸精化（神戸市中央区） 化学品商社

＜データ＞1994年、サイエンスプロモーションとして設立。2004年大神薬化、21年に神戸精化と社名変更。化粧品や電子材料の化学品を扱う。松長祐史社長は名古屋学院大卒、15年から現職。23年2月期売上高は前期比33%増の15億7千万円を見込む。社員9人。



白米のようなポリ乳酸（中央手前）と食品トレーやコップなどの生分解性プラスチック製品